

『法華経』「方便品」の一二の偈頌について

——テキスト校訂の問題を中心に——

岩 松 浅 夫

1. 『法華経』(Saddharmapundarika-sūtra) の梵本はこれ迄に幾つか出版されてきているが、その最初はケルン (H. Kern) と南条文雄両氏による所謂「ケルン・南条本」¹⁾ ということになろう。このケルン・南条本はまた、『法華経』の梵本として現在も恐らく最も多く依用されているものと言ってよいであろうが、他方、同本はテキスト校訂の上からは種々問題のあることも指摘されており、そのことも学界周知の事実であろう。

ところで、この『法華経』には、他の大部分の経典の場合と同様、中に多数の偈頌が含まれている。近時筆者は、その中の第 2 章「方便品」(upāyakaśalya-parivarta) に所収の 1 偈について、私見を公にする機会を得た²⁾。その内容についてはここでは省略するが、実は筆者は、それに関連して同品中の他の偈頌についても調べている間に、幾つか気付いたことがあった。そこで、ここではそのような中の一二について、述べてみることにしたい。具体的には、第 5～7 の 3 偈と第 12 偈に関することがらであるが、内容上は今も少しく触れたケルン・南条本のテキスト校訂 (本文批評, textual criticism) に関する問題ということになろう。

2. 初めに、第 5～7 偈についてであるが、先ずその本文をケルン・南条本によって示せば、次のようなものということになる³⁾。

ahaṃ ca tat prajānāmi ye cānye lokanāyakāḥ |
 yathā yad yādṛśaṃ cāpi lakṣaṇaṃ cāsya yādṛśaṃ || 5 ||
 na tad darśayituṃ śakyaṃ vyāhāro 'sya na vidyate |
 nāpy asau tādṛśaḥ kaścit sattvo loke 'smi* vidyate || 6 || * WT lokesmi.
 yasya taṃ deśayed dharmam deśitaṃ cāpi jāniyāt |
 anyatra bodhisattvebhyo adhimuktiya ye sthitāḥ || 7 || (p. 31)

さて、ここで筆者がこれら 3 偈を纏めて採上げようとしたのは、実は筆者は先述の件でこの部分の和訳も参看している間に、訳の中には後の第 6, 7 の両偈を一緒にして訳すものがあることがやや気になったからである。例えば、松濤誠廉氏等の和訳では、この部分は次のように訳されている⁴⁾。

(134) 『法華経』「方便品」の一二の偈頌について (岩 松)

それがどんなあり方であり、どのようなものであり、またその様態がどのようなものであるかということについて、私も知っており、他の世間の指導者たちも知っている。(五) それを示すことは不可能であり、それを言いあらわすことばもない。だれか(ある衆生)に向かってこの法を説き、説かれた法を(彼が)理解する、そのような衆生は、この世間には一人も存在しない。信順の気持をもって出で立っている菩薩たちを除いては。(六、七)

一方また、このようにこれら両偈を一連で不可分とする見方を我が国で最初に示し、それを主張したのは、筆者の知る限り、渡辺照宏氏だったのではないかと思われる。実際、氏はこの両偈の部分を

(六一七) それを示すことはできないし、それを述べることばもない。そのものに対してかの法を教示すべきようなもの、または、教示された(法)を知るようなもの、そういうような生きものは、世の中にひとりもない。ただし信念が堅固なボサツたちを除く。

と一纏めにして訳すとともに、それに続けて次のようにも述べられている⁵⁾。

以上の六一七頌は⁴続けて読まない⁴と意味が通じない。チベット語訳をはじめ、フランス語訳、英訳みなそうである。南条・泉訳と岩本訳⁶⁾とは別別に訳すが、よくない。妙法華はこの二頌を合せて五字六句に訳す。(傍点引用者)

そして、このような氏の見方が松濤氏等にもそのまま受容れられて前掲のような訳になり、更にはその後にも及んで今に来ているのではないかと思われる⁷⁾。

3. このように、第6, 7の2偈は訳者や学者によっては一連で不可分のものとされているわけであるが、しかし、本来ならサンスクリットの偈頌は文章的にはそれぞれの偈毎に完結している筈のものであるから⁸⁾、その立場乃至原則からすれば、このことはかなり奇妙ということにもなる。では、これに対してはどのように考え、対応したらよいのであろうか。それに関しては、先ず第6, 7偈を不可分とする渡辺氏の意見(以下、「渡辺説」と呼ぶことにする)の検討から始めるのが順序ということになる。

その第6偈と第7偈の関係について検討する前に、念のために第7偈の2行の関係を見ておくと、それらが不可分であることは、構文の上からも、また両偈を含むこのグループの中では韻律はこの第7偈迄が Śloka で、次の第8偈からはそれとは別の Triṣṭubh-jagatī になるということから、疑いないと言ってよいであろう。そこで、そのことを前提に両偈の関係について改めて見てみると、後の第7偈は yasya という関係代名詞で始まるが、それを受ける相関詞(correlative)は同偈自身の中にはなく、むしろその前行即ち第6偈の第2行の中にそれに相当し

得べき asau の語が見られる、という構文になっていることが知られる⁹⁾。ということで、同氏の言う第6偈をその第2行に読替え(限定し)て言えば、渡辺説は取敢えずはその通りと見てよいであろう。

さて、それでは次に、今度はその第6偈の第1行と第2行同士の関係について見たときには、果してどのようなことになるであろうか。両行はやはり不可分ということになるのであろうか。と言うのも、もしそれらが不可分ならばこの問題に対する見方にもそれ以上の進展はないということになるだろうが、そうではなくて⁴分けて⁴見る⁴ことができる場合には、両偈にその前の第5偈を併せた3偈に対しては、別様の見方も可能になってくると思われるからである。それは、具体的には、該3偈中に含まれる半行詩(half verse)の6行は、現刊本通りの3偈ではなくて、それぞれが3行ずつの2偈をなしているのではないか、ということである。そして実際、果せるかな、そのような観点から件の両行を見てみると、それらは決して不可分などころか、むしろ相互に無関係で殆ど独立していると言っても過言ではない、という状態の関係にあることが知られるのである。それとともにまた、第1行をその前の第5偈に移し、それに続く形で一文にしてみても、文章的には齟齬や矛盾は一切生じず、むしろ反対に文意はすっきりしてより明白になる、と言ってもよいかもしれない。

4. こうして筆者は、上掲の「方便品」の3偈はケルン・南条本(及び、他の現行諸刊本)でそうされているように1偈が2行の言わば標準的な3偈ではなくて、それぞれが3行ずつの2偈を表すものではないかと考え、またそう捉えることを提起したいとも考えるのであるが、それらをそのように改めて⁴見る⁴ことは幾つかの点からも支持され、或いは傍証し得るのではないと思われる。例えば、そのような1つとして、先ず西藏訳¹⁰⁾を挙げることができるであろう。すなわち、そこではこの部分は

/de ni 'jig rten rnam 'dren pa//gzhan dag na ni¹ ngas kyang de//ci lta yin dang ci 'dra dang//de yi mtshan nyid ci 'dra shes//de ni bstan du mi nus te//de ni brjod du yod² med dol//mos pa la ni gang gnas pa//byang chub sems dpa' ma grtogs bar³//gang la chos de bstan pa dang//bstan pa dag kyang shes pa yi//de 'dra'i sems can su yang ni//jig rten dag na yod ma yin/

1 N dang ni. 2 ND yong. 3 NDCL gtogs par.

と、明らかにそれぞれが^{まさ}正しくそのような3行ずつの2偈であるように訳されているわけである¹¹⁾。

或いはまた、偈末に付された偈番号もその1つとして挙げることもできるかも

(136) 『法華経』「方便品」の一二の偈頌について (岩 松)

しれない。すなわち、単に偈の順番だけではなく時にはその区切り方も表すことになるこの番号は、ケルン・南条本を始め現行の諸刊本では一見如何にも確定的で動かし難く付けられているように見受けられるが、これも実は必ずしもそうではなくて、つまり動く可能性があり、特に本経の場合にはそれも決して小さくはあるまい、ということである。と言うのも、この偈番号は、写本に迄遡って言えば、数多くある本経の写本の中でもそれが記されていることが確認されるのはただ1つ、具体的には所謂ペトロフスキー本（カシュガル本とも）だけで¹²⁾、そして恐らくケルン・南条本もそれをそのまま襲用したのであろうが、実はそれ以外には見られないものだからである。すなわち、それ以外の写本では、件の3偈は該ペトロフスキー本（や、延いては現行諸刊本）とは偈の構成が別様に捉えられていた、その可能性は多分に考えられよう、というわけである¹³⁾。

なお、念のために付言すれば、該 Śloka の3行詩（3 half-verses）云々の件に関しては、一般に文法書等の簡単な偈頌の解説の中でもその存することは言われているが¹⁴⁾、実際にも、例えばパーリの *Dhammapada* では Śloka の全357偈中の36偈（割合では10.1%）、またそれに対応するサンスクリットの *Udānavarga* でも同じく768偈中の65偈（割合は8.5%）でそうになっており、更にそれ（3行詩）が2つ続くということも、例えば *Suttanipāta* 中には現に見られるので（例えば、306-7偈、及び762-3偈など）、特に問題はないと言ってよいであろう¹⁵⁾。

5. 次に、これは前の場合とはやや異なり、どちらかと言えばむしろ些細な問題ということになるかもしれないが、テキストの校訂という点ではやはり看過し得ないと思われることがらがあるので、それについても触れておくことにしたい。それは、同じケルン・南条本では第12偈の

pratyekabuddhāna anāsravāṇām
 tiṅṣṇendriyāṇāntimadehadhāriṇām |
 diśo daśa* sarva bhavyeṣu pūrṇā *MSS. daśah,
 yathā naḍānām vanaveṇunām vā || 12 || (p. 32)

という偈の特に最後の行（第4詩句、d pāda）の vanaveṇunām の語に関してで、すなわち、この語（形）はもちろん vana- と veṇu- の複合語（compound）（の属格 [G. pl. n.] 形）ということになるが、果してこのままでよいか、ということである。と言うのも、筆者は、これに対しては語意及び文意の上から少なくとも2つの点で疑問を感じ、疑念を拭い去ることができないからである。

その問題点というのは、1つは、先ずこれの語意即ちこの語が表そうとしてい

る内実は何かということ、それがこの場合には不明でよく分らない——少なくとも、筆者には——、ということである。と言うのも、この複合語は後分の *veṇu-* (竹) にその性質その他を限定・修飾する *vana-* (林, 叢) の語が冠されてできたものであるが、被修飾語と修飾語の関係¹⁶⁾ ということで見たときに、例えば前者の「竹」には後者の「(他の樹木の) 林」の中に生えるものとそうでないものがあるが、それぞれ性質が異なるとか、或いは同じく前者には後者の「叢林」を作るものとそうでないものがあるとかして、そのような中のどれかに限定するためにかくされたというのなら、このような複合語とすることにもそれなりに意味があるわけであるが、しかし如何にインドの「竹」とは言えそのようなことはいずれも考え得まいから、もしそうとすればこの複合語は不可解で、表す意味内容も不明になる、というわけである¹⁷⁾。因みに、念のために言えば、筆者が確認し得た範囲では、この *vanaveṇu-* のような語はどの辞典類にも、少なくとも見出し語としては掲げられてはいない¹⁸⁾。

次にまた、この複合語はこのままでは、構文上 *yathā* で結ばれる譬えるもの (譬喩語) と譬えられるもの (被譬喩語) は、前者はもちろん同語の後の *naḍānām* と当該の *vanaveṇunām* で、また後者はここではそれらと同じ属格 (genitive) 形の *pratyekabuddha-* (辟支仏) ということになるだろうが、もしそうとすると、この文では辟支仏が *naḍa-* (葦) や *vanaveṇu-* (竹?) に直接譬えられ (したがって、辟支仏は *naḍa-* などのように纖長で真っ直ぐ?), 或いは、この場合の属格はいずれも *yathā* の前の *pūrṇa-* (満ちた, 一杯の) の内容物を示す一種の補完語ということになるので、同語 (*yathā*) の後の *naḍa-* などはその *pūrṇa-* の「何で」の例と見ることもできるかもしれないが (すなわち, *diśo daśa* [十方 (世界)] は *naḍa-* などで一杯のように辟支仏で一杯?), いずれにしてもおかしいことになってしまうのではないであろうか。と言うのも、ここで言おうとしているのはもちろんそのようなことではなくて、辟支仏の密集している様 (の譬え) のことであろうからである。

では、もしこのように該 *vanaveṇunām* の語 (形) には幾つかの点で問題が存するとすれば、これについては一体どのように考え、対応したらよいのであろうか。これはそれ程面倒でも、また難しい設問でもないであろう。すなわち、筆者の考えでは、恐らく梵本の校訂者は前分の *vana* を額面通りに語幹と取って次の *veṇunām* との複合語としたのであろうが、これをそうではなくて変化——ここでは、具体的には主格 (N. sg. n.) ——形と見て¹⁹⁾、両語を分綴してやればよいということである。そして、そうすれば当該の *veṇunām* はその前の *naḍānām* と同じ資格 (格形)

(138) 『法華経』「方便品」の一二の偈頌について (岩 松)

で vana に係り、また yathā で結ばれるのもその vana と diśo daśa (十方〔世界〕) ということになるなど、文章的にはかなりすっきりし文意も明白になって、上述の如き問題点も全て解消するということになるろう。

6. 以上、最近筆者が『法華経』の特に「方便品」中の偈頌について少しく調べている間に、偶ま気付いたことを一二採上げて述べてみた。初めにも触れたように、『法華経』の梵本にはテキストの校訂上種々問題のあることが言われているが、それらはその殆どが文字や語句などの異読に関するものだったように思われる。しかし、中にはそれ以外にも、例えば上述のようなことも存するということが、そのような問題点や課題の一端なりとも指摘し得たとすれば、本稿の目的は達されたと言ってよいであろう。

最後に、上掲の第5～7偈に対する筆者の訂正偈文²⁰⁾とそれの拙い私訳を掲げて、取敢えずこの辺で擱筆することとしたい。

aham ca tat prajānāmi ye cānye lokanāyakāḥ |
yathā tad yādṛśam cāpi lakṣaṇam cāsyā yādṛśam |
na tad darśayitum śakyam vyāhāro 'sya na vidyate || 5 ||
nāpy asau tādrśaḥ kaścit sattvo lokesmi vidyate |
yasya taṃ deśayed dharmam deśitam cāpi jāniyāt |
anyatra bodhisattvebhyo adhimuktīya ye sthitāḥ || 6 ||

私（釈迦牟尼仏）と、他の（自分と同じ）世界の指導者（導師）（=仏）たち〔だけ〕がそれ（修行〔菩薩行〕の結果である悟り）を、〔すなわち〕それがどうであり、どのようなものであるのか、またその（悟りの）特色（相）がどのようなものであるのか（ということ）を了知する（悟りがどのようなものであるのかを本当に知る〔知っている〕のは、実際にその悟りを得た自分や自分と同じ仏たちだけである）、それを〔他人（仏以外のもの）に〕示すことはできないし、またその（ための）言葉も存在しない。（五）

また、その教え（法）を〔仏が〕説く（に値する）であろうような、そしてまた（況して？）説かれた（その）ことを知る（理解する=理解できる）であろうような、そのような生き物（衆生）は、優れた理解力を有する（原意は、信解に住する）菩薩たちを除いて、（この）世界には誰も存在しない。（六）

1) H. Kern & B. Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica vol. X, St. Pétersbourg 1908-12, rep. Osnabrück 1970 (= KN).

2) 拙稿「梵文『法華経』「方便品」第29偈について—和訳と解釈をめぐって—」『創価大学人文論集』第22号, 2010年, 参照.

3) KN, p. 31. なお、ここでは参考のため、KNに次いで多用されていると思われる荻原・土田本（荻原雲来・土田勝弥『改訂 梵文法華経』聖語研究会, 昭和9-10年, 再刊, 山喜房仏書林, 平成6年=WT）の当該部分に関する異読（29ページ参照）も一緒に

掲げておくことにした。

- 4) 松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義『大乘仏典4 法華経I』中央公論社, 昭和50年, 41ページ参照. なお, ここでは文脈上, また参考のため, 第5偈の部分も一緒に掲げておくことにする.
- 5) 渡辺照宏「詳解・新訳法華経(第三十回)」『大法輪』昭和43年7月号, 106ページ参照. なお, 第5偈は前回の「同(第二十九回)」で, そこでは次のように訳されている。「(五)それがどうであり、また、どういうものか、それを知っているのは、私、ならびに、それ以外の、世界の導師たちである。」(『同』昭和43年6月号, 100ページ参照). 因みに, ここ(同訳の「大意」の項)で言うフランス語訳と英訳とは, それぞれ E. Burnouf, *Le Lotus de la bonne Loi, traduit du sanskrit, accompagné d'une commentair et de vingt et un memoires relatifs au Buddhisme*, Paris 1852 及び H. Kern, *The Saddharma-pundarika, or The Lotus of the True Law, Sacred Books of the East vol. 21, Oxford 1884* (それぞれ再刊本もあり) のこと.
- 6) 南條文雄・泉 芳璟『梵漢対照 新訳法華経』尋源会出版部, 大正2年, 及び坂本幸男・岩本 裕『法華経 上』岩波文庫, 昭和37年, の岩本氏による梵本からの和訳のこと. なお, 筆者の気付いた範囲では, この部分の和訳にはこの他にも, 岡 教達『梵文和訳法華経』大阪屋号書店, 大正12年, と荻原雲来・土田勝弥「梵文法華経偈文の研究」『聖語研究』第2輯, 昭和9年, の2つがあるが, そこでもこの両偈は共に分けて(独立の別文として)訳されている.
- 7) 例えば, 中村瑞隆『現代語訳 法華経 上』春秋社, 1995年, でも, この両偈はやはり同じように一つの文として訳されている.
- 8) この点については, 例えば MacDonell の書の次の言などを参照. '[T]he whole Śloka contains a complete sentence[,] [t]he construction does not run on into the next line,' A.A. MacDonell, *A Sanskrit Grammar for Students*, 3rd. ed. Oxford 1927, rep. London 1955, p. 234. (本文中では 'Śloka' の語を「偈頌」と読替えたが, 後述するようにここ〔第5~7の3偈〕で用いられている韻律は実際に Śloka のみなので, 実質上問題は何も起らない.)
- 9) 渡辺氏も, その理由は述べられていないので正確なところは不明であるが, 恐らくこのことから, 前述のようなことを主張されたものかもしれない.
- 10) ここでは, 西藏訳のテキストは中村氏が作成されたものを(異読やその標記法も含めて)そのまま利用させて頂くことにした. 中村瑞隆「チベット訳 法華経」『法華文化研究』第2号, 1976年, 35ページ参照.
- 11) 因みに, この西藏訳から和訳されたものとして, 河口慧海『梵蔵伝訳 法華経』上~下, 世界文庫刊行会, 大正13年, があるが, そこでは, この部分は偈には梵本と同じ番号を付けた上で次のように訳されている(『同』上, 3ページ参照).

それは世界の導師なる 他の者等に我はまた 如何なるか如何様なるか その相の如何なるかを知つて (五)

それを示すことはなし能はざるなり それには言語あることなく 信解に住する所の 菩薩を除きては (六)

誰にその法を教示するも また教示されたる言語を知ることには於ても 実の如くなし得る衆生は誰もまた 一切世界に存在せざるなり (七)

(140) 『法華経』「方便品」の一二の偈頌について (岩 松)

- これは、恐らく梵本（ケルン・南条本）を参考に、それに合せる形でこのように訳されたものであろうが、西藏訳そのものからすれば必ずしも正確な訳とは言い難い。
- 12) この点、即ち該偈番号が（確認し得る範囲では）ペトロフスキー本だけで他には見られないことについては、例えば『梵文法華経写本集成 ローマ字本・索引』第2巻、梵文法華経研究会、1988年（例えば、第5～7偈を含む第1群〔1～21偈〕全体については25-66ページ、また当該の部分は33-8ページ）などを参照。
- 13) 因みに、写本の中には詩句末に *daṇḍa* を2本だけのものと1本と2本のそれを両方用いているものがあり、後者の中には当該の第5偈を一見3行詩の如くにするものもなくはないが（例えば、'N1'の写本など。なお、この点については前注12)に所掲の書の33-5ページを参照）、しかし他の箇所を見ると両者の使い分けはそれ程厳密ではなく、むしろ混同も見られるようなので、それだけで行末か偈末かを速断するのは問題で、むしろ危険ということにもなろう。
- 14) この点については、例えば前注8)に所掲の書の次の語などを参照。'Occasionally three half-verses are found combined into a triplet,' MacDonell, *ibid.*
- 15) ここでは、*Dhammapada* と *Suttanipāta* は各 Sumaṅgala Thera 及び Andersen と Smith による PTS 版、また *Udānavarga* は Bernhard によるもの (F. Bernhard, *Udānavarga*, Sanskrittexte aus den Turfanfunden X, Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-Historische Klasse Dritte Folge, Nr 54, Bd. I, Göttingen 1965) をそれぞれ用いることにした。なお、*Udānavarga* の数値は算定の仕方によって多少動く可能性がある。また、*Suttanipāta* における3行詩は全587偈中の34偈、割合は5.8%で、前の2者よりは若干——かなり？——低くなっている。
- 16) 因みに、この場合にはこの複合語は Tatpuruṣa (格限定複合語、依主釈) で、前語の格形は於格 (locative) か若しくは具格 (instrumental. 或いは、与格 [dative] ?) が考えられるということになろう。
- 17) 因みに、この語と併拳される *nada-* の方にはこのような語は冠されていないことに注意。
- 18) 唯一の例外が『梵和大辞典』で、同辞典にはこの『法華経』を出典として同語が掲出され、「竹林」の対応漢訳語も示されている。しかし、この「竹林」をそのまま「たけのはやし」の意に取れば *vanaveṇu-* とは別意で一致しないことになるので、この対応には（或いは、採録そのものにも）問題があるということになろう。
- 19) この (*vana* の場合のような a 語幹の) 語幹形がそのまま曲用（ここでは主格 [N. sg. n.]）形も表し得ることについては、例えば *BHSG*, §§ 8.31-4 などを参照。
- 20) ここでは、上述のような3行詩2連とした他に、本文中の（底本 = KN 本の）5c の *yad* と 6d (筆者のでは 6b) の *loke 'smi* を、前者は渡辺氏 (前注5) に所掲の後の論文〔第二十九回〕の100ページ参照、また後者は WT 本 (前注3) 及び上掲の本文部分を参照) に従って、それぞれ *tad* 及び *lokesmi* と改めた。

〈キーワード〉 『法華経』, 偈頌, テキストの校訂, 3行詩, *Saddharmapuṇḍarīka*, Śloka
(創価大学教授)